

ねん がつ にち  
2024年1月14日

ねんかんだい しゅじつ  
年間第2主日

きくち いさおだい しきょう  
菊地 功大司教 メッセージ

しゅ しんでん ね しょうねん しゅ ちよくせつこえ よ だ  
主の神殿で寝ていた少年サムエルに、主は直接声をかけ呼び出されます。

サムエル記は、少年サムエルがたびたび神からの呼びかけを受けた話を記し、それに対して祭司エリが、「どうぞお話しください。しもべは聞いております」と応えるようにと指示をした話を記します。謙遜に耳を傾けたときにはじめて、神の声がサムエルの心の耳に到達しました。

きょうかい いまともにあゆんでいるシノドスの道も、同じことを求めています。霊的な会話という分かち合いの中で、互いに語る言葉に耳を傾け、議論することなくその言葉を心に留め、さらに耳を傾けて祈るときに、初めて聖霊の導きを見いだす準備ができる。決して、おまえはどうしてそんなことを語るのだと議論することではなく、耳を傾けるところからすべては始まります。

インターネットが普及した現在、わたしたちはその中で、耳を傾けることよりも、議論し、論破することに快感を感じてしまっているのではないのでしょうか。そこに神の声は響いているのでしょうか。

「来なさい。そうすれば分かる」とイエスに呼びかけられたヨハネの二人の弟子も、納得できる証拠を求め徹底的にイエスと議論したからではなく、イエスの存在とその語る言葉を心に響かせたからこそ、イエスがメシアであることを確信しました。だからこそ福音は、「どこにイエスが泊まっておられるかを見た」と記し、徹底的に議論したとは記しません。サムエルの「どうぞお話しください。しもべは聞いております」と言う態度に通じる謙遜さです。

ことし せかいへいわ ひ あ きょうこうさま してん おお か へいわ  
今年の世界平和の日に当たり、教皇様は視点を大きく変え、「AIと平和」というメッセ

ージを<sup>はっぴょう</sup>発表<sup>さんげん</sup>されました。それは<sup>にんげん</sup>尊厳<sup>にんげん</sup>ある人間<sup>にんげん</sup>と、その人間<sup>う</sup>が生み出した<sup>だ</sup>技術<sup>ぎじゆつ</sup>を<sup>たいひ</sup>対比<sup>ひ</sup>させるなかで、人間<sup>にんげん</sup>とは<sup>いったいなにも</sup>一体何者<sup>あらた</sup>であるのかを<sup>み</sup>改めて<sup>な</sup>見つめ直<sup>お</sup>そうという<sup>よ</sup>呼びかけ<sup>よ</sup>です。

教皇<sup>きやうこうさま</sup>様は、「<sup>し</sup>死ぬ<sup>まぬが</sup>ことを<sup>にんげん</sup>免れ<sup>げんかい</sup>えない人間<sup>にんげん</sup>が、あらゆる<sup>とつ</sup>限界<sup>ば</sup>を<sup>とつ</sup>テクノロジー<sup>ば</sup>によって<sup>とつ</sup>突破<sup>とつ</sup>しよう<sup>と</sup>と<sup>かんが</sup>考え<sup>し</sup>れば、すべて<sup>し</sup>を<sup>し</sup>支配<sup>し</sup>しよう<sup>し</sup>という<sup>かんが</sup>考え<sup>と</sup>に取り<sup>じ</sup>つかれ<sup>こ</sup>、自己<sup>せい</sup>を<sup>ぎ</sup>制御<sup>ぎ</sup>できなくなる<sup>き</sup>危険<sup>けん</sup>があります。・・・<sup>ひ</sup>被造物<sup>ぞうぶつ</sup>として、人間<sup>にんげん</sup>には<sup>げんかい</sup>限界<sup>にんしき</sup>があると<sup>う</sup>認識<sup>い</sup>しそれを<sup>か</sup>受け<sup>い</sup>入れる<sup>い</sup>ことは、<sup>じゆうまん</sup>充満<sup>いた</sup>に至<sup>お</sup>るため、さらに<sup>お</sup>く<sup>もの</sup>い<sup>じゆうそく</sup>え<sup>う</sup>ば<sup>と</sup>贈り物<sup>と</sup>として<sup>う</sup>充足<sup>と</sup>を受け<sup>と</sup>取る<sup>と</sup>ために、<sup>か</sup>欠<sup>か</sup>いて<sup>し</sup>は<sup>し</sup>ならない<sup>し</sup>条件<sup>じょうけん</sup>です」と<sup>し</sup>記<sup>し</sup>して、<sup>み</sup>自<sup>う</sup>らが<sup>だ</sup>生<sup>だ</sup>み<sup>だ</sup>出<sup>だ</sup>した<sup>だ</sup>技術<sup>ぎじゆつ</sup>に<sup>か</sup>過<sup>か</sup>信<sup>しん</sup>し、<sup>ぎ</sup>逆<sup>ぎ</sup>に<sup>ぎ</sup>それ<sup>ぎ</sup>に<sup>ぎ</sup>支配<sup>し</sup>される<sup>し</sup>こと<sup>し</sup>の<sup>し</sup>ない<sup>し</sup>よう<sup>し</sup>にと<sup>し</sup>警告<sup>けいこく</sup>されて<sup>い</sup>ます。

「どうぞ<sup>は</sup>お<sup>な</sup>話<sup>な</sup>しく<sup>な</sup>ください。しも<sup>き</sup>べ<sup>き</sup>は<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>いて<sup>き</sup>お<sup>き</sup>り<sup>き</sup>ます」という<sup>けん</sup>、謙遜<sup>けん</sup>な<sup>けん</sup>態<sup>たい</sup>度<sup>ど</sup>で、<sup>た</sup>他<sup>た</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>こ</sup>声<sup>こ</sup>に、<sup>か</sup>そ<sup>か</sup>して<sup>か</sup>神<sup>か</sup>の<sup>こ</sup>声<sup>こ</sup>に<sup>こ</sup>耳<sup>み</sup>を<sup>か</sup>傾<sup>か</sup>て<sup>か</sup>て<sup>か</sup>参<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>う。